三重県埋蔵文化財調査報告190

立梅遺跡発掘調査報告

― 三重県飯南郡飯南町粥見 ―

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

序

このたび、一般地方道片野飯高線の改築工事に伴い消滅していく遺跡の一部を発掘調査いたしました。

ご存じのようにこの地域は、櫛田川流域の河岸段丘の地で、生活のための立地条件に恵まれ、粥見井尻遺跡や伊勢本街道、和歌山街道などの歴史的遺産が存在しており、郷土の歴史を究明するうえで重要な地域となっております。

このたびの調査の結果を概観いたしますと、立梅遺跡からは室町時代の土坑を伴う掘立柱建物が発見され、この地域の沿革を追究するうえからも貴重な資料になると考えられます。この発掘調査の成果が消滅した遺跡に代わり、郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切望いたします。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県土整備部ならびに松阪地方県民局建設部、飯南町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成11年3月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　大　井　與　生

例　　言

1．本書は、一般地方道片野飯高線県単道路改築工事に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部から執行委任を受けて実施した、飯南郡飯南町粥見字立梅に所在する立梅（たちばい）遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は、下記の体制で行った。

調　査　主　体　　三重県教育委員会
調　査　担　当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
主　事　奥　野　　実
調　査　期　間　　平成10年９月16日～平成10年10月20日
調　査　面　積　　６００㎡

3．調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課・松阪地方県民局建設部・飯南町教育委員会および地元の方々のご協力を得た。

4．本書の執筆・編集・遺物写真・発掘調査後の出土遺物の整理は、奥野が担当し、資料普及グループ業務補助員が補助した。

5．図面における方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北を用いた。なお、当地域の磁針方位は、西偏６°20′（平成４年５月）である。

6．本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。
ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑

7．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応させてある。

9．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ．前言……1
Ⅱ．位置と歴史的環境……2
Ⅲ．層位……3
Ⅳ．遺構……6
Ⅴ．遺物……7
Ⅵ．結語……8

挿図目次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　遺跡地形図……4
第３図　調査区位置図……4
第４図　Ａ地区遺構平面図・Ａ地区土層断面図……5
第５図　Ｂ地区遺構平面図・Ｂ地区土層断面図……6
第６図　ＳＢ１実測図……7
第７図　出土遺物実測図……7

表 目 次

第１表　出土遺物観察表……8

図版目次

図版１　Ａ地区全景（北東から）……9
　　Ｂ地区全景（北東から）……9
図版２　ＳＢ１（東から）……10
　　出土遺物……10

Ⅰ．前　　言

今回の発掘調査は、平成10年度一般地方道片野飯高線県単道路改築工事に伴い実施された。立梅遺跡は、飯南郡飯南町粥見字立梅に所在し、飯南町遺跡番号15の周知の遺跡である。北方には櫛田川が流れ、その流域は香肌峡県立自然公園に指定されている。付近には、道の駅「茶倉」やアウトドアライフを存分に楽しめる「リバーサイド茶倉」などの諸施設が充実している。

調査に先立ち平成８年12月に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の約600㎡について遺跡が存在する事が確認された。

これを受けて、遺跡保存に向けて県土整備部と文化財保護の協議を重ねた。その結果、保存が困難であるという結論となった。そして、道路改築工事の及ぶ範囲について調査を実施し、記録保存することとなった。

現地調査にあたっては、地元地区在住の方々に補助をしていただいた。記して感謝します。

磯田タチ、井上たき、井上弘子、井本とみゑ、内坪やえ、大西安、岡田敏子、河村正子、越山紀子、小杉昌子、佐古みつよ、田中保、谷口茂、田端日出子、鳥本かづ、中川茂、中西和美、中村孝子、中村忠一、中村とき江、中村トシ子、中村ふさ、野呂正治、野呂まつゑ、浜田恵美子、浜田春樹、政木恵美子、松倉とみゑ、松倉とみ代、水本典子、森田信一郎、森田敏、森本一夫、弓木せつ子

(1) 調査日誌抄

９月10日　松阪県民局建設部と現地協議。

９月16日　重機による表土掘削開始。

９月17日　表土掘削終了。

９月25日　掘削作業開始。Ａ地区の検出、掘削。

10月２日　Ｂ地区の検出、掘削。Ａ地区土層断面図作成。

10月５日　Ａ地区清掃、写真撮影。

10月６日　Ｂ地区清掃、写真撮影。

10月８日　飯南町ケーブルテレビ放送〝茶王〟の取材を受ける。発掘用具片付け。

10月９日　遺構平面図作成。Ｂ地区土層断面図作成。

10月14日　発掘道具撤収。

10月20日　松阪県民局建設部へ引き渡し。

(2) 調査の方法

(ア) 調査区の設定

調査区は、２地区に分かれており、北方をＡ地区、南方をＢ地区とした。そして、調査区を４ｍ四方の升目で区切り小地区を設定した。西から東へ１～５、北から南へＡ～Ｚを配置した。なお、この地区設定は、国土座標とは無関係である。

(イ) 遺構図面

調査区全体の平面図は、平板測量により縮尺１／100で作成した。ＳＢ１の遺構平面図と各土層断面図は縮尺１／20で作成した。

(ウ) 掘削方法

表土は重機で、包含層以下・遺構までを人力で行った。

(3) 文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成10年８月４日付道建第240号（県知事通知）

・法98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成10年10月14日付教生第1106号（県知事通知）

・遺失物法にかかわる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）
平成10年12月10日付教生第８－30号（県教育長通知）

II．位置と歴史的環境

立梅遺跡は、三重県飯南郡飯南町に所在する。飯南町は、県境の高見山に源を発する櫛田川の中流域に位置し、櫛田川によって形成された段丘上の平坦地と急峻な傾斜地から成り立っている。

立梅遺跡（1）は、櫛田川右岸の標高約116mの河岸段丘上に位置し、現況は茶畑となっている。

ここでは、今回の調査に関連する歴史時代の遺跡を中心に、当遺跡の所在する粥見地区を中心に概述する[1]。

現在、櫛田川の上流・中流の河岸段丘において、多数の旧石器時代から縄文時代の遺跡が確認されている。そのなかでも、平成8年度の発掘調査によって縄文時代草創期の土偶が出土した粥見井尻遺跡（2）が特筆される。同遺跡からは、草創期の4棟の竪穴住居が確認され、隆線文土器や矢柄研磨器をはじめ多数の石器が出土している。草創期の住居跡の発見は全国的にも貴重で、県史跡に指定されることになっている[2]。その他、有舌尖頭器が出土した堂之庭遺跡（3）、大鼻式や大川式の押型文土器や石鏃などが表採された足ヶ瀬遺跡（4）、大川式の押型文土器や石鏃など表採された奥新田遺跡（5）などが、旧石器時代の末から縄文時代早期の遺跡としてあげられる。

このように、当遺跡周辺では県内でも早くから人々が定住していたと考えられる。

弥生時代になると、遺跡数は希薄となり、横野地区において2遺跡が確認されているだけとなっている。続く、古墳時代の遺跡については、現在のところ見つかっていない。

次に歴史時代であるが、古代においては飯高郡に属していたと考えられる。しかし、当期に該当する遺跡は、現在確認されていない。

続いて中世となり、伊勢神宮領の「粥見御薗」の存在が知られている[3]。同御薗について、永承4年（1049）に御薗の司が殺される事件が起こったことが記されている[4]。また、正平24年（1369）には祭主大中臣為綱の宿所があったとされる[5]。これにより、平安時代末頃には成立し、室町時代初めまで存続していた可能性がある。

また、平安時代末と鎌倉時代後期に、粥見流祭主の大中臣為仲〔永暦2年補任（1141）〕、大中臣為継〔文永10年補任（1273）〕、大中臣為継〔正和元年補任（1312）〕が居住・生活の拠点にしていたと考えられている[6]。このように伊勢神宮との関連も深くなってくる。

南北朝時代には北畠氏の支配下となった。安土桃山時代は、蒲生氏郷・服部一忠・古田重勝・古田重治の所領に属した。

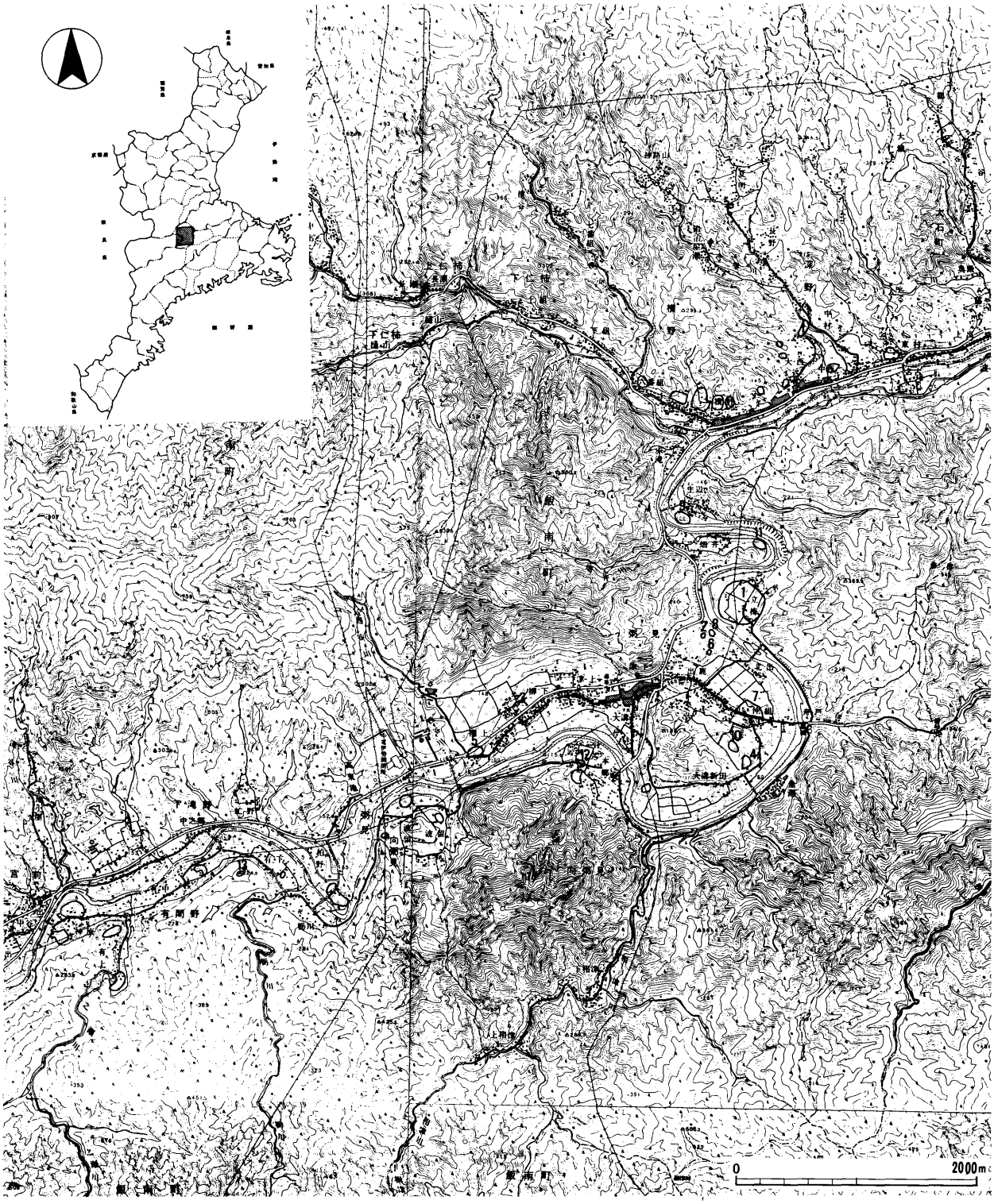
中世の遺跡としては、発掘調査によって室町時代終わり頃の掘立柱建物1棟が見つかっている粥見井尻遺跡、室町時代の掘立柱建物4棟と溝3条が検出された粥見小林遺跡[7]（6）、鎌倉から室町時代の溝3条や土坑などが見つかっている溝端遺跡[8]（7）がある。また、分布調査によって川ノ上遺跡（8）、生辺遺跡（9）からは、土師器片や山茶椀片が、上ヶ所遺跡（10）、ニゴリス遺跡（11）からは土師器片が表採されている。粥見地区以外の遺跡としては、平成7年度の発掘調査によって平安時代末期から室町時代中期の掘立柱建物3棟と溝5条などが見つかった奈可切遺跡[9]（12）や『源平盛衰記』の伊勢滝野合戦の条に出てくる滝野城[10]（13）が知られている。

江戸時代には紀州藩領となり、下出江組に属する粥見村となった。そして、粥見の地は、紀州藩の公道として使われた和歌山街道（現国道166号線）と紀州や大和から伊勢に向かう近道や参宮道として利用された和歌山別街道（現国道368号線）の分岐点として、宿駅（伝馬所）がおかれ繁栄した[11]。また、文政6年（1823）に西村彦左衛門の計画により立梅から櫛田川の水を引き入れ、丹生まで送水する立梅用水が造られた[12]。

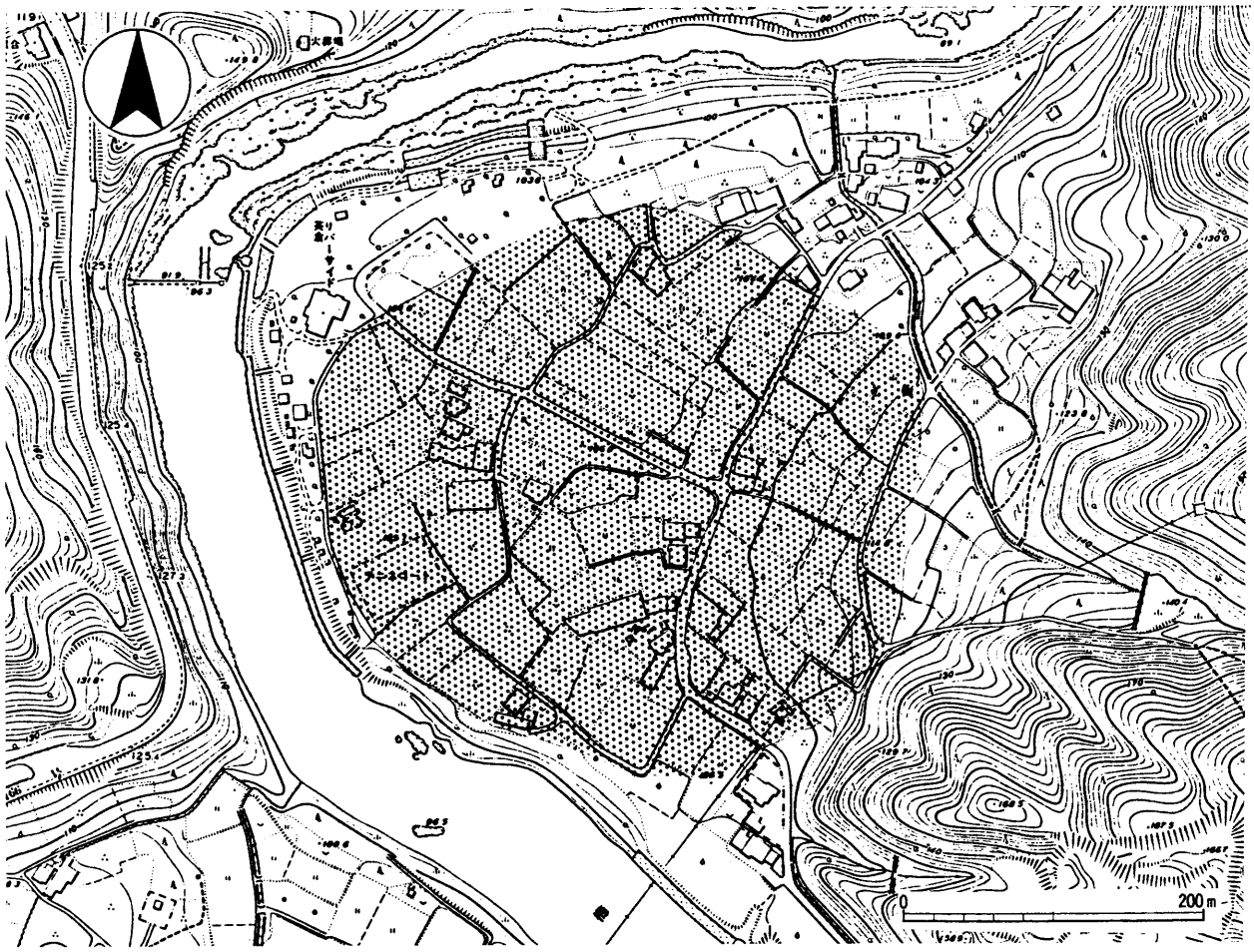
明治時代には、廃藩置県後、度会県に属し、その後、明治9年（1876）三重県に属し、現在に至っている。

III．層　　位

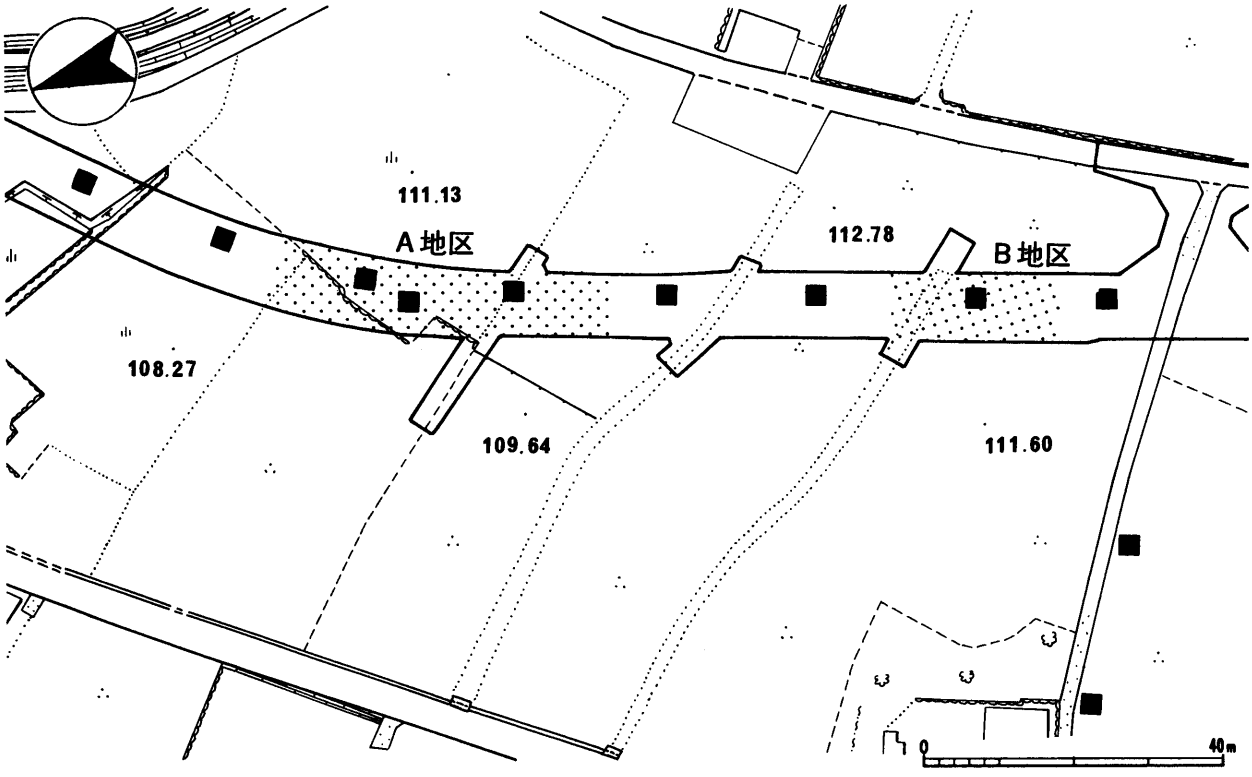
基本的層序は、上より第1層：黒褐色土（表土）、第2層：黒色土、第3層：にぶい黄橙色土〔混礫〕、第4層：黄褐色粘質土となる。遺構検出面は第3層上面である。



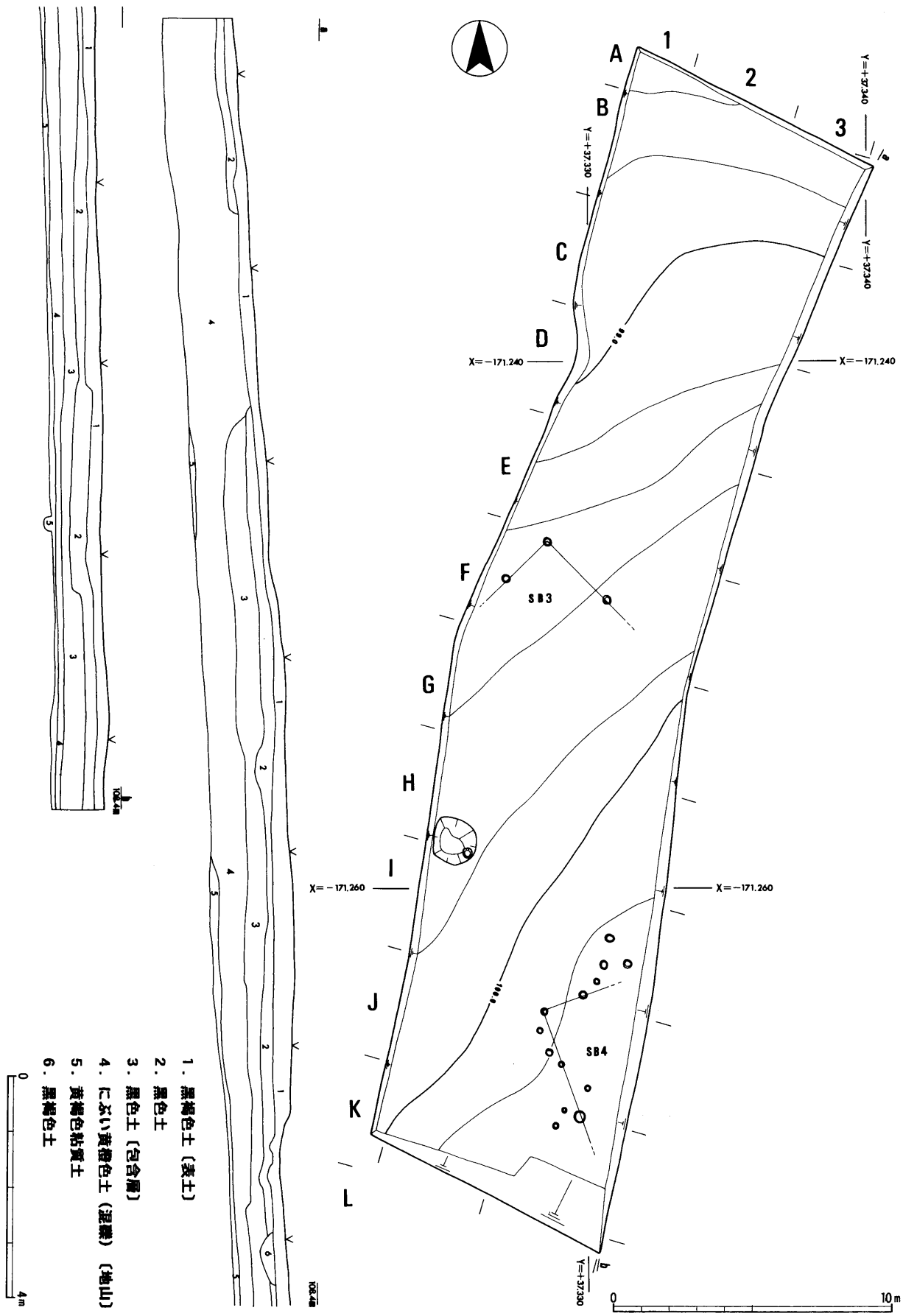
第1図　遺跡位置図（1:50,000、国土地理院『横野』『宮前』『伊勢佐原』『江馬』1:25,000から）



第２図　遺跡地形図（1:5,000）



第３図　調査区位置図（1:1,000）〔■試掘坑〕



第４図　Ａ地区遺構平面図（1:200）・Ａ地区土層断面図（1:100）

Ⅳ．遺　　構

当遺跡では、掘立柱建物３棟を検出した。

(1) 室町時代

(ア) 掘立柱建物

ＳＢ１（第６図）　南東隅土坑を伴う掘立柱建物と考えられる。調査区Ｂ地区の中央部において検出した。調査区外にのびるため、全ては確認できなかった。東西棟の建物とすると、桁行３間以上、梁行３間以上の建物で、棟方向はN25°Ｅと考えられる。柱間は桁行東側より、1.5+2.2+2.0m、梁行北側より2.0+2.0+2.2mと不揃いである。柱掘形は径0.3～0.4m、深さは0.1～0.4mで、厚さ0.1mの川原石を根石にもつ。矢印の柱穴の掘形埋土より土師器鍋の小片が出土した。

東側に東西２間×南北２間分の南東隅土坑（ＳＫ２）を伴う。幅1.7m、長さ2.4m、深さ0.3mの長方形を呈する。埋土は黒色土で、土師器鍋、陶器甕の小片などが出土した。

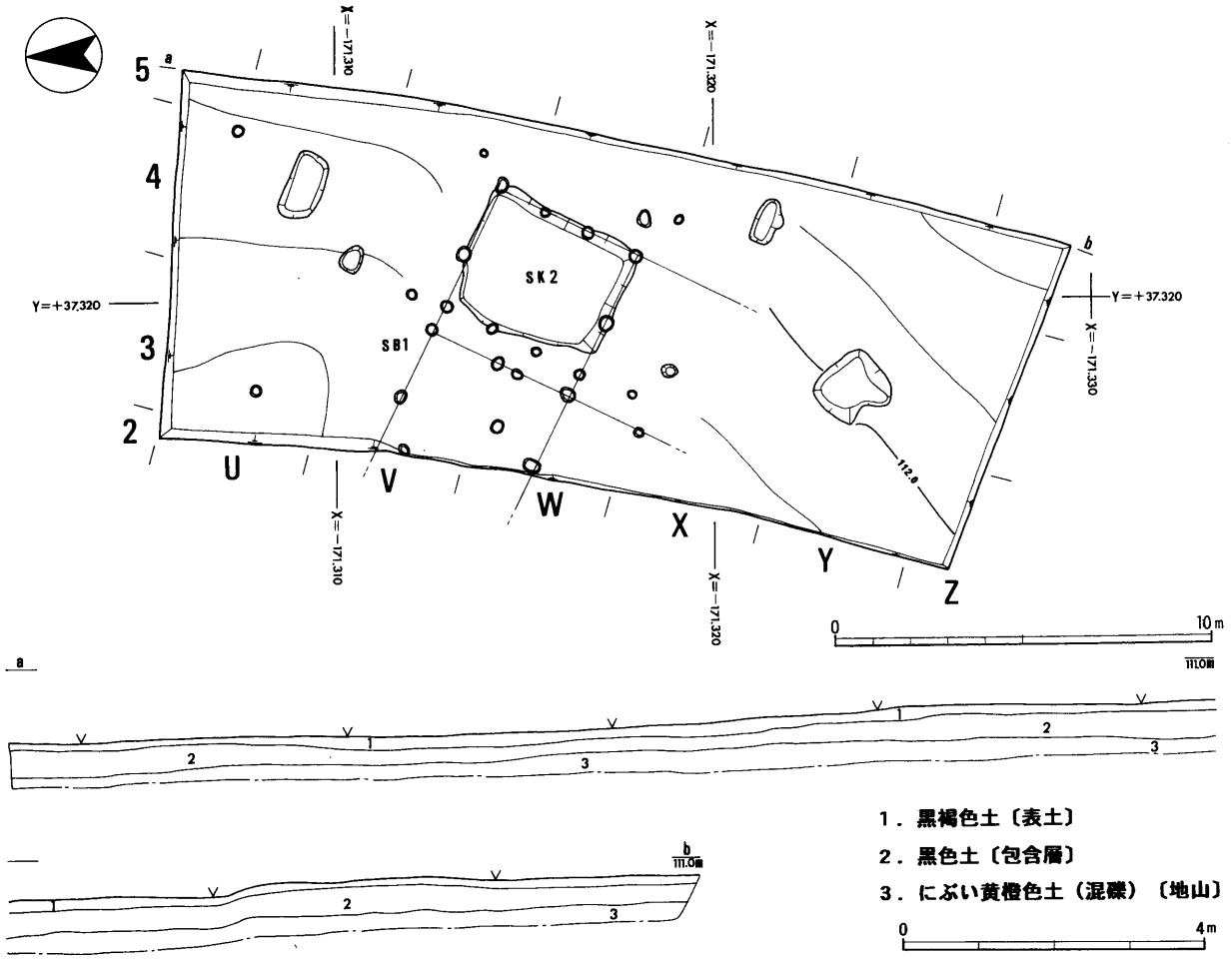
土坑の南方と北方には、柱穴が対応して検出され、小さな間取りが想定される。

(2) 時期不明の遺構

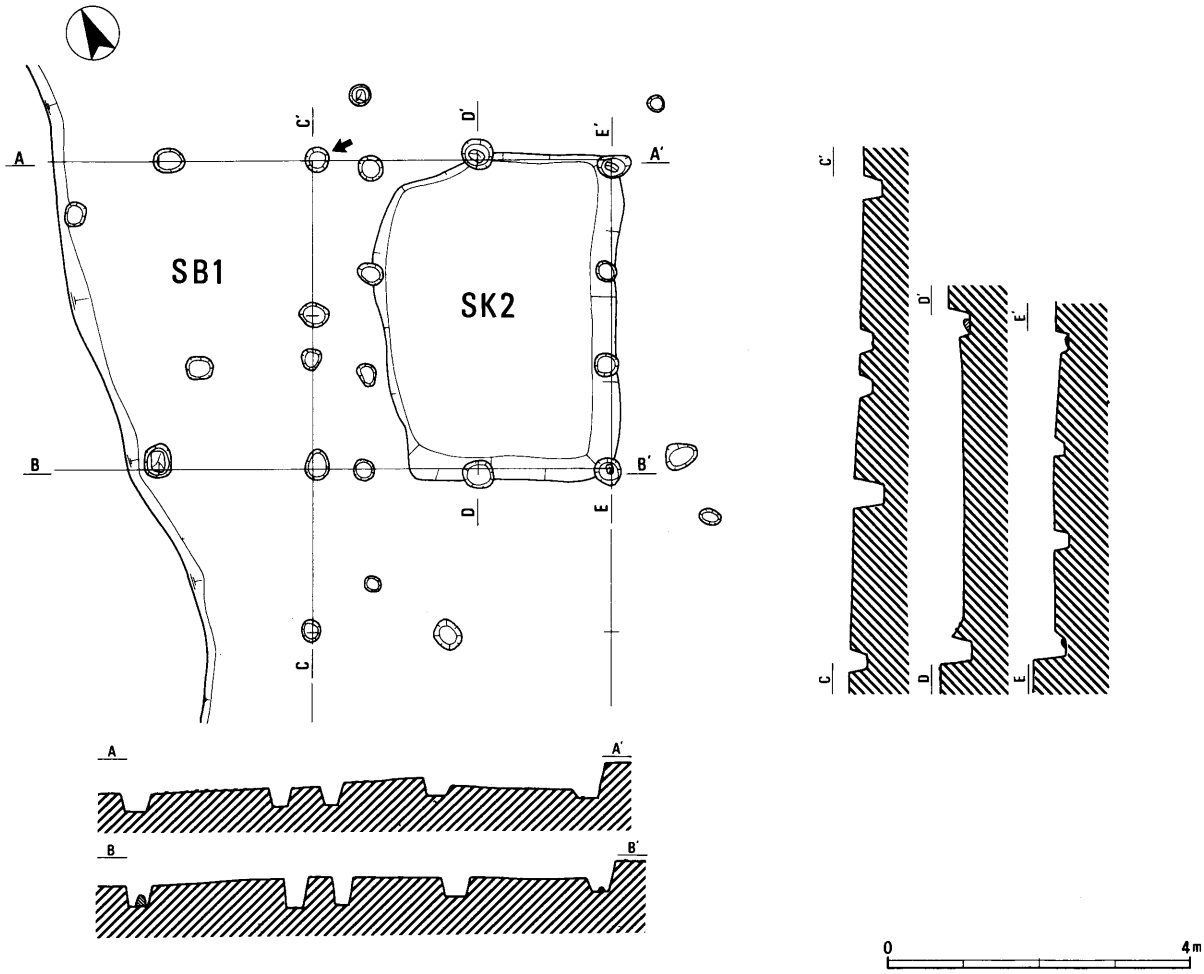
(ア) 掘立柱建物

下記のＳＢ３・４については、未検出の柱穴があるため、掘立柱建物の可能性があるものとしてあげた。

ＳＢ３（第４図）　調査区Ａ地区の中央部において検出した。検出できなかった柱穴もあり、定かではないが１間以上×１間以上の建物と考えられる。出土遺物はない。



第５図　Ｂ地区遺構平面図（1:200）・Ｂ地区土層断面図（1:100）



第６図　ＳＢ１実測図（1:100）　水糸高は112.0m

ＳＢ４（第４図）　調査区Ａ地区の南端部において検出した。検出できなかった柱穴もあり、定かではないが２間以上×１間以上の建物と考えられる。出土遺物はない。

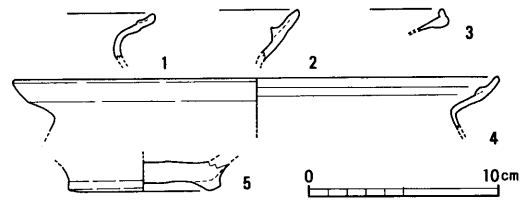
Ｖ．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして２箱であった。これらの遺物は、鎌倉時代と室町時代の２つの時期に大別できる。

以下に特徴的な遺物について概略を述べる。個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

土師器鍋(1･2･3･4)　１は伊藤編年の第３段階ａ型式に当たる[13]。２はＳＢ１から出土した。伊藤編年の第３段階ｂ型式に当たる。３は伊藤編年の第４段階ｂ型式に当たる。４は口縁部に煤が付着している。ＳＫ２から出土した。伊藤編年の第３段階ｂ型式に当たる。１・２・４は14世紀～15世紀前半のもの、３は16世紀後半と考えられる。

山茶椀(5)　底部のみの残存で、藤澤編年の５型式に当たる[14]。鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀初）のものと考えられる。



第７図　出土遺物実測図（1:4）

番号	実測番号	器種	出土位置		計測値(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	001－04	土師器鍋	W 4	包含層			内面～外面ヨコナデ	やや粗 ～1.5mmの小石含む	良	10YR8/2 灰白	口縁 小片	
2	001－03	土師器鍋	V 4	SB1			内面～外面ヨコナデ	粗 ～2mmの小石含む	良	10YR8/2 灰白	口縁 小片	
3	001－02	土師器鍋	試掘				内面～外面ヨコナデ	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁 小片	
4	001－05	土師器鍋	U 4	SK2	26.0		内面～外面ヨコナデ	粗 ～2.5mmの小石含む	良	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁 1/10	口縁部に煤付着
5	001－01	山茶椀	A地区	表土	高台径 7.0		内面ロクロナデ、外面ナデ 底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや密 ～2mmの小石含む	良	2.5Y6/2 灰黄	底部のみ完形	

第1表　出土遺物観察表

Ⅵ．結　　語

今回の調査は、道路建設に伴う狭い面積の調査であったが、室町時代の南棟隅土坑を伴う掘立柱建物1棟を確認した。

南棟隅土坑を伴う掘立柱建物については、浅尾悟氏による資料の整理・集成がある[15]。

その中で、建物については、「中型の建物（4間×4間）に最も多いこと。土坑は南東隅に1間×2間規模で柱の四隅にそって造られており、土坑の性格は、中・近世の民家の現存例から『厩』が妥当とされている。また、建物の時期については、平安時代末に出現し、鎌倉時代にかけて多く確認され、室町時代の発見例は少ないと考えれること。発見例が少ない理由として、同時期の集落跡の調査例が少ないこと。」などを記されている。

しかし、近年、当遺跡と近くの度会郡度会町鮠川西出B遺跡でも15世紀代の建物跡が3棟検出されており、南伊勢地方では室町時代まで存続していた可能性が高い[16]。

今後、近世の民家にどの様に変遷していくかなど、南棟隅土坑を伴う掘立柱建物について考察していくうえでの資料を提供したと考えられる。

また、位置と歴史的環境に記したように、当遺跡の存在した時期には、伊勢神宮領の粥見御薗や祭主の宿所が存在した可能性があり、当遺跡との関連も想定できる。しかし、この課題については、現在のところ、考察するための資料が限れており、指摘のみにしておきたい。

〔註〕

① 以下、註のない遺跡概要については、下記の文献を参照した。奥　義次「第2編第1章原始」（『飯南町史』飯南町、1984年）。

② 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報8』（1997年）の30頁。　中川明、松葉和也『粥見井尻遺跡範囲確認調査報告』（飯南町教育委員会、1997年）。

③ 『神鳳鈔』（群書類従本）の304頁。

④ 『太神宮諸雑事記』永承4年（1049）6月条（群書類従本）の115頁。

⑤ 『大日本史料』第6編之31の274頁。

⑥ 岡田荘司「中世の大中臣祭主家」（『大中臣祭主藤波家の歴史』続群書類従完成会、1993年）の114頁。

⑦ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報8』の30頁（1997年）。

⑧ 筒井正明『溝端遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑨ 西出孝『奈可切遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑩ 『日本城郭大系第10巻　三重・奈良・和歌山』（新人物往来社、1980年）の157・158頁。

⑪ 三重県教育委員会『初瀬街道・伊勢本街道・和歌山街道』（1982年）の181頁。

⑫ 「第3編第1章農業」（『飯南町史』飯南町、1984年）。

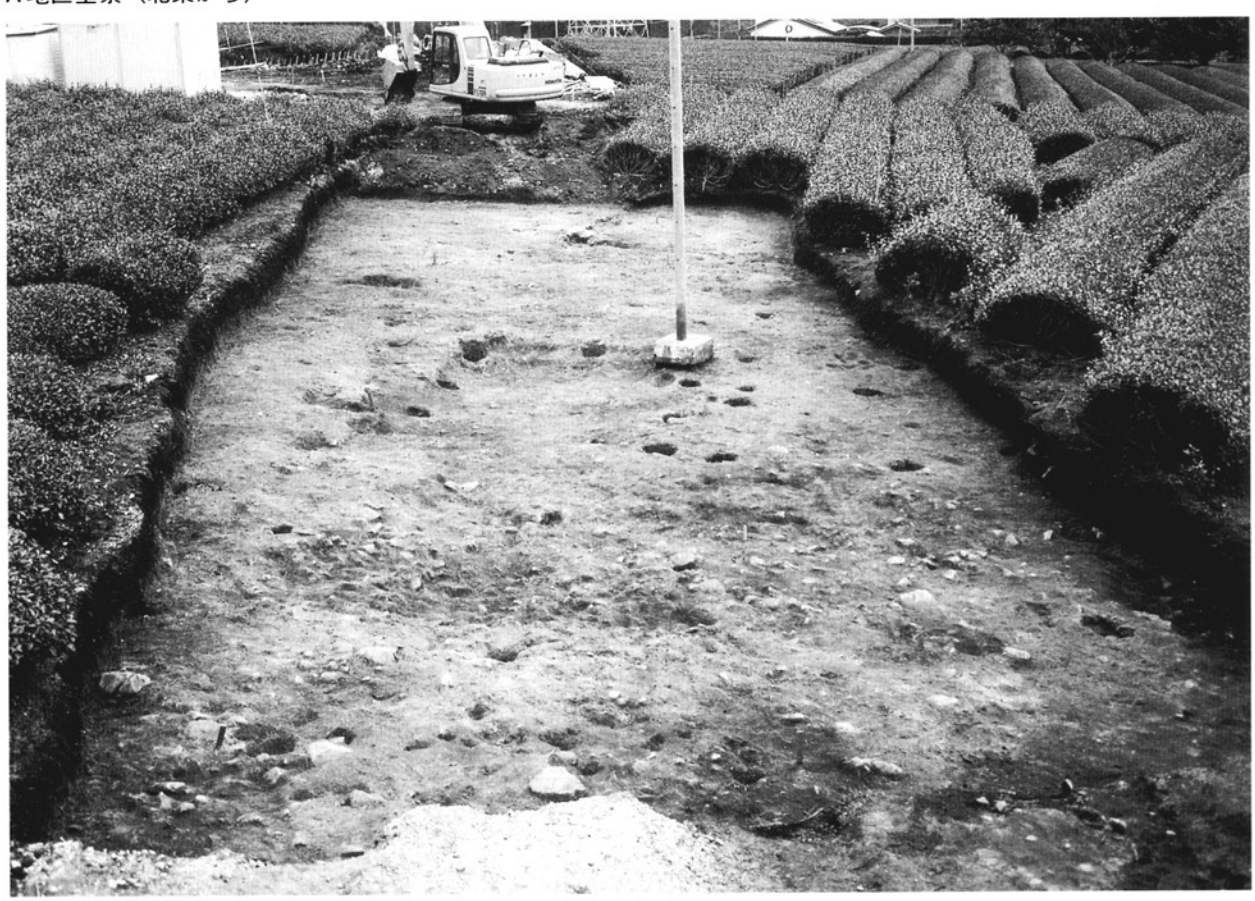
⑬ 以下、伊藤編年については、下記の文献による。
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年。）
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、1996年）。

⑭ 藤澤良佑「山茶椀研究の現状と課題」（『研究紀要第3号』、三重県埋蔵文化財センター、1996年。）

⑮ 浅尾悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」（『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1990年）。

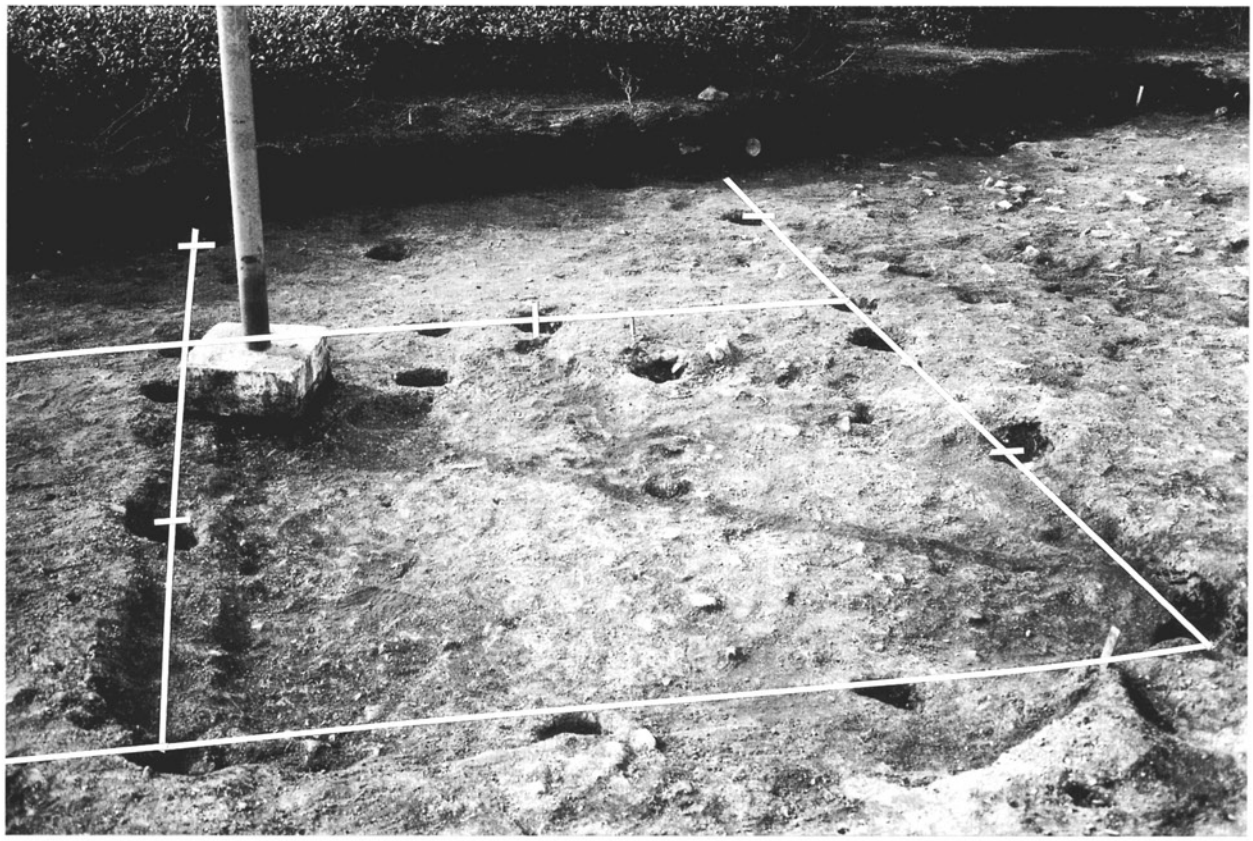
⑯ 坂倉一光『鮠川西出B遺跡（第2次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

A 地区全景（北東から）

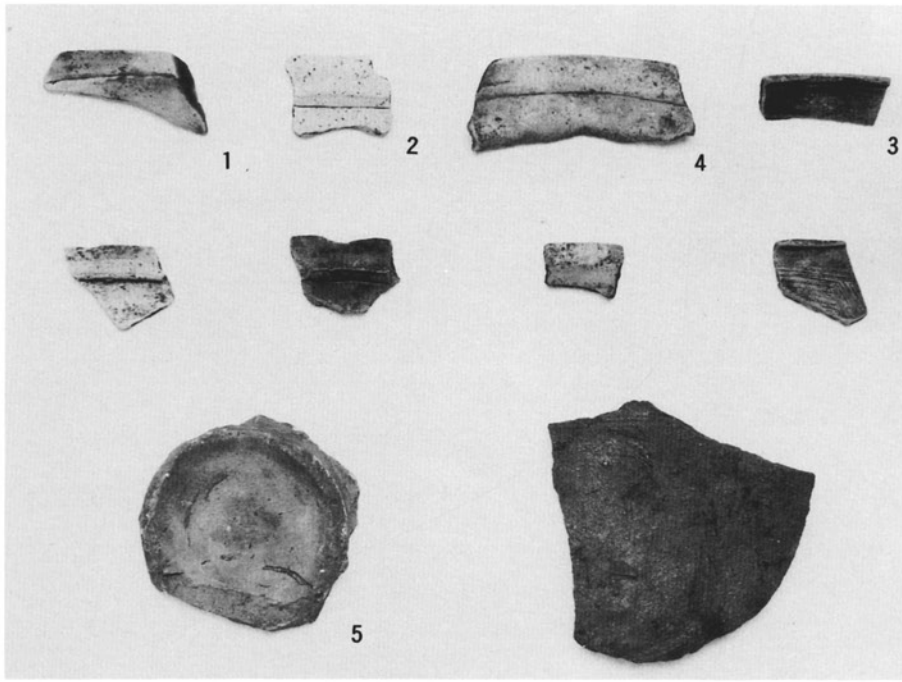


B 地区全景（北東から）

図版 2



ＳＢ１（東から）



出土遺物（1:3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	たちばいいせきはっくつちょうさほうこく
書名	立梅遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１９０
編著者名	奥野　実
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			°′″	°′″		m²	
たちばいいせき 立梅遺跡	みえけんいいなん 三重県飯南 ぐんいいなんちょうかゆ 郡飯南町粥 みあざたちばい 見字立梅	市町村 24421 遺跡番号 15	34° 27′ 17″	136° 24′ 22″	19980916 ～ 19981020	600m²	一般地方道片野飯高線道路改築工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立梅遺跡	集落跡	室町時代	南東隅土坑を伴う掘立柱建物	土師器鍋 陶器甕	

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年9月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告190

立梅遺跡発掘調査報告
— 三重県飯南郡飯南町粥見 —

1999年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　有限会社第一プリント社